



踊りや長唄、唄り物といった芸事のうち、紗幸はお座敷で笛を担当。得意の節に絡み、最近稽古を始めた三味線を披露する。

〔上〕毎年1月に浅草公会堂で行われる「新春浅草歌舞伎」での「浅草総見」の様子。公会堂の入り口に浅草の芸者衆が揃い、華やかに客を迎える。〔中〕姉さん芸者のあづはと半玉のこずえとともに、宴席を盛り上げる。半玉とは芸者見習いのこと。京都での舞妓さんにあたる。〔下〕「浅草総見」の日には、見物から浅草公会堂まで人力車で乗り付ける。途中ですれ違う人々は、普段なかなか見かけない光景に、思わずカメラを向けていた。



浅草の科挙「格八」にて、リサイクル着物ショップ「たんす屋」を展開する「東京山産」の社長・中村健一とは、着物に関するイベントで出会い、意気投合。以来、妙中をサポートしてくれている。

を知り、「学校に行かないで、違う世界で一年も過ごせるのは最高」という軽い気持ちで応募した。東京近郊の町でホームステイをしながら高校に通う毎日、見るものすべてが目新しくワクワクするものだった。しかし当初はまだ言葉も話せず、日本の社会や習慣に慣れるまで苦労があったという。

「相性もあるし、特に日本語が理解できるようになるまではつらかったですね。三週間目ころから三ヵ月くらいが山場だったかな」と振り返るが、一年の長期間、親元を離れたのは自立につながる良い訓練となった。そして、日本に対する興味も強くなる。

一旦帰国した後、大学入学のため

伝統世界に身を投じて三年



めに再来目する。慶應義塾大学に籍を置き、さらに日本企業に就職、と紗幸の人生は日本に軸を置いたものとなっていった。二年ほど働いたが、ある年渡英する。オックスフォードの大学院で社会人類学を専攻。博士論文は「ニッポンのサラリーマン」だった。また、MBA(経営学修士)も取得した。

その後は大学で講師を務める傍ら、テレビ番組のプロデュースを行う。社会人類学を修めた視点を生かした番組を作っていた。転職となったのは、一本の映画だった。「SAUYURI」。貧しさゆえに芸者となった女性の一生を描いたハリウッド映画だが、幾分アメリカ的な演出は否めない作品だ。「本当に芸者は、そして日本の社会や文化はこのようなものか」

純粋な疑問は彼女の情熱を刺激し、静かに、しかし強い決意をもたらす。自身が芸者となり、その経験を本や番組として発表することを通して、「芸者」の真実を伝えられないだろうか。日本に暮らした歳月に積み上げた経験を生かして取り組んでみたい。

紗幸を動かしたのは、あくまでも知的好奇心だったことに驚きを感じる人は少なくない。しかし、本当の姿を知り、伝えたい、それが自分の役割だと信じた情熱に周

囲の協力が加わることになる。大学のつてを頼り、いくつものハードルを乗り越えて芸者になるための見習いを始めることに成功した。置屋を紹介してもらい、料亭で仲居の修業をする。だがそれはスタート地点にさえ立っていないことにならざるを得ない。一人前の芸者になるためには、長くそして深い芸事の訓練が欠かせない。理想は子ども頃から親しんでいること、と浅草見番(置屋などの取りまとめを行う事務所)の千葉慶二は言う。お茶の稽古に踊りや鳴り物を習い、長唄、小唄とつづく。一つ一つの文化的、歴史的背景を理解してこそ芸は生かされるのだ。また行儀作法、言葉遣い、客のもてなし方、そして季節の着物を揃え、四季折々の出し物を習得する。

方ないことだった。

「この先どうなるのか、本当にお披露目できるのか、芸者になることができるだろうか」

しかし一旦やると決めた以上、そして始めた以上は続けるのが紗幸流、やり遂げなくては気が済まない。先行きの見えない日々であっても、自分のできること、やらなくてはいけないことを一つずつ

これは下積みとして当然のことにする

ぎない。与えられた役割を果たし、経験を積むことよってのみ、「芸者になる」ことができるのだと理解する。

「芸者は一生勉強なんです」

一生、という言葉は、ドキュメンタリー番組を作り、本を書くという明確な目的意識とは別のものが感じられる。自ら身を置く世界に寄

せる愛情のような。

それは芸者であり続けるため、たゆみない努力と情熱を注ぐ紗幸の日常の基軸になっている。



その筆頭に和服がある。芸者の正装である出の着物（五つ紋つきの裾を引く第一礼装）に始まって、普段着や小物まで、季節

や場に合わせ、細やかな配慮を伴

った着こなしが要求される。紗幸はこれにかける時間をいとわない。

住まいの近くに偶然見つけた和服工房に出入りするうちに、「私らしい着物を作りたい」という気持ちが高まって、絵師を探してみた

り、布地に工夫を凝らしたり。それも「勉強のために」と、自ら仮縫

いをするつもりで教えを請う。昔

段着の手入れはその練習になるのだという。

和服姿は髪形で決まる。紗幸にとって美容室で髪を整えてもらうのは身だしなみの仕上げに当たる。細くて柔らかいブロードの髪を、

顔に合う、かつ芸者らしい髪形へと結びあげるには、美容師もかな

り苦労したらしい。紗幸のこだわりを形にするための尽力がこどもも惜しみなくなされている。



(上) 早稲田大学国際教養学部
の学生向けに行われた「キャリア
アワード」にて、芸者としての
活動について話す。講演後、学
生からは質問が相次いだ。(中
右) 通りがかりに見つけた和服
の工房「書光」で、着物の手入れ
について教えてもらう。(中
左) 着物の古道具の様子。今回は鼓
に合わせて祭り囃子の練習だ。

文化的背景を 理解してこそ 芸は生きる

このような日々の結実として、紗幸の心にはひとつの夢がある。「芸者」を正しく理解してもらいたい。偏ったイメージには義憤すら感じるようだ。

「芸者とお座敷は日本の民間における伝統文化の継承者」というスタンスを、海外メディアの取材を通して伝えようとする。

また日本人には、お座敷遊びや芸者文化がもつと気軽に近づけるものに、親しみやすいものになってほしいと望む。自身でホームページを開き、直接コンタクトできる仕組みを作った。できるだけ多くの要望に応えようとするものだ。地元の浅草以外の場所へも積極的に出かけて行き、ホームパーティーや企業イベントなどで芸を披露することもあった。

同時に、これからの道のりであることを思い知る。お披露目にこぎつけるのがこれほど困難でも、そ

クリアすることに集中した。

二〇〇七年二月一九日に芸者お披露目を果たしたときには、大きな関門を一つ潜り抜けたような感慨があった。

「とにかくうれしかったし、ほっとしました」

同時に、これからの道のりであることを思い知る。お披露目にこぎつけるのがこれほど困難でも、そ



いただいた反物を見せながら、染め付けや仕立ての相談をする。

「着物の場合は髪もきちんとしなければ」と、人前に出るときには必ず美容院へ。芸者になってからずっと通っている代官山の「Y.S. PARK」(www.yspark.net/)。



